

昭和五十七年五月

蟹江町歴史民俗資料館

年報

第三冊

目次

「沿革誌より」	1
蟹江むかし物語	11
地形図に自然・歴史を読む	33
須成祭の社会学的考察	55
第三十番小学聚秀学校から	
第四十七番小学須成学校へ	
長尾英彦	121
蟹江町信仰遺跡覚書	
加藤真弓	137

蟹江むかし物語(三) 小杉 正

一、江戸時代の村のようす

蟹江町の北の方から、当時の記録を参考にして調べてみよう。

。須成村

田 八十九・五四ヘクタール余

畑 二十・四ヘクタール余

高 二千四百四十石八斗七合

寛文(一六六〇年)のころ、百五十八戸、人口七百七十六、馬四十一、文政(一八二〇年)ごろ、二百四十戸、人口千四十四、馬なし。

高持(自分の田畑を持っている人)は十六戸で、他は小作人ばかりで小作地は七年目毎に割りなおすことになっていた。農商を兼業する家は二十戸ほどあり、灰問屋が二戸あった。

しかし、村は貧しく、氏神天王社の修造もできかねたので、寛政十二年二月から月六日間の市が御免になり、近郷の人々が集まり、盛んに売り買いがされた。

富吉天王



須成祭の社会学的考察

目次

序	56
第一章 調査地の概要	57
第二章 須成祭の概要	66
一、祭の歴史的背景	69
二、須成祭の現在	78
三、祭の変化	80
第三章 祭組織	84
一、敬神会	87
二、祭保存会	88
三、須成区の組織	90
四、祭組織	92
結び	92
参考文献一覧	92

序

祭といえ、もとは神を祀るものだということとは誰も
が知っていることだと思ふ。しかし、今日、祭といえ、
神を祀るものというよりは、「お興さわぎ」という言葉
に代表される華やかな山車や神を連想する人も多いと
思ふ。祭という言葉も様々な場所で異なった使われ方を
している。しかし、祭とは、もともと「神と神を祭るも
の」の間で行われることはいまでもなく、神のない祭
などというものは、元来考えられないものである。

祭という漢字は、中国では家の先祖にあたる人に奉仕
するおまつりという意味をもっており、日本でも「まつ
り」という言葉の初めの用途は子孫が先祖を祭る場合に
限られていただろうと思われる。また、詣るといふ日本
語も、以前は、共に定めの場合に出頭して、少なくとも
ある時間そこに居るといふ意味で、もとは籠るといふこ
とも同じで、ある一つの祭典に参加することを言った。
この祭のもともとの意味からして、祭行事の中心は屋内

の奉仕にあつたようである。一般には、大祭を祭礼、小
祭を祭と呼んでいるようである。そして、現在私達が祭
と呼ぼうとしているのは、華やかな風流を伴つた祭礼と
呼ばれるものがほとんどである。

この祭礼の特色として、見物者としての祭への参加者
がいることである。日本のほとんどの祭は、神に対して
の祭というより、この見物者に「見られる祭」として変
化してきており、これが本来の姿であるかのようにうけ
とられている。特に、このような祭の変化は、夏祭にお
いてよくみられる傾向が強く、御霊信仰と夏祭との結び
つきにおいて考えることができる。また、夏祭における
変化は、都市から農村においても独自の社会生活に適し
た祭というものが展開してきている部分もあるのではな
いかと考えるのである。

このような祭の変化の要因として、祭の担い手である
氏子組織の変化というものが挙げられる。元來、同じ血
縁関係にあるものが、共に同じ祖先の好意に感謝しよう
とするのが、社において神を祭り始めた唯一の動機であ